わが町の

企業応援団

株式会社ベル

代表取締役　奥 斗志雄 さん

「愛と感動」を合言葉に1992年の創業以来、清掃やビルメンテナンス業務に携わっておられる（株）ベルさん。2年前から【JSN】の実習を受け入れて下さり、現在は卒業生2名が就職して活躍しています。

すみずみまでピカピカに磨かれた社内は、さすが清掃会社！取材当日は従業員さんの誕生日会が行われており、手作りの料理を囲んで和気あいあいの雰囲気。一人ひとりがイキイキと働く会社の秘密を、奥社長に伺って参りました。

トップセールスマンを経て独立「人」の大切さを知る

—奥社長が会社を設立されるまでの経緯を教えて下さい。

私は幼少時代から「社長になる」という夢を持っていました。小学5年生から新聞配達をしており、「世の中にはお金をもらう人と渡す人がいるんだ。自分は将来、渡す方の人になりたい」と思っていたんです。工業高校を出てから大手OA機器メーカーに就職し、14年間会社員生活を送りました。トップセールスマンだったので、退職して独立する時は周囲にものすごく止められました。

—なぜ清掃業を選んだのですか？

実は24才から8年間、会社には内緒で週末は清掃のアルバイトをしていたんです。どちらの仕事も一生懸命に行い、将来独立する道を模索していました。そんな中、私は電気工事の資格を持っていたので、将来は清掃を含めた総合ビル管理の仕事もできるのではないか？と考えるようになりました。清掃の仕事なら資本金も少額で独立できますし、自分は営業が得意だったので強みになるとも思いました。

—1992年に創業され、今年で26年目を迎えました。

独立したものの、現実は厳しかった。個人事業主になって社会的信用をほとんどなくしている事実に直面し、初年度は私に付いてきてくれた従業員と二人で働いても、サラリーマン時代の年収より売り上げが下でしたから。当たり前の日々は、見えない力とご縁あってこそだと気付いたんです。そこからはとことん考え、一生懸命がむしゃらにやるのみ。絶対にクレームは出さず、「そこまでするか！さすがプロ！」と言われる仕事を徹底しました。

—その頃の経験が、今の奥社長の哲学につながっているのですね。

「絶対に仕事は断らない」と覚悟を決め、どんなに多忙な時でも自分自身が率先して一番厳しい現場に入っていました。そうすると従業員が「応援し合って助け合う」という社風が生まれたんです

—顧客満足度のみならず、社員の幸せをとことん考える企業として昨年、「日本で一番大切にしたい会社 審査委員会特別賞」に選ばれています。

サラリーマン時代は「人＝物」でした。仕事ができない人を叩きのめしていました。しかし、自分が経営者になってからは「人」を大切にして、「人」を基準として物事を考えていくようになりました。2006年に「従業員への約束」として「従業員は財産です。従業員の夢と自主性を尊重し、才能の伸展と業績への貢献を、最大限に支援できる環境をつくります。従業員と共に誇りと満足を分かち合います」と定めました。受賞させて頂いたことは嬉しいですが、自分の中ではまだまだやと思っています。

支援員の志や姿はめちゃくちゃ重要です

—障害者雇用を考え始めたのはいつ頃でしたか？

2004年のことです。高知県の四国管財（株）という会社に出会い、見学に出向いたんです。そこでは精神障害者の方がモップの洗濯を高圧洗浄機を使って行っていたんです。普通は気が散ったり嫌になったりしてしまう作業を、ずっとコツコツと続けている。中澤社長から「精神障害者の方の特性を生かすことで、すごく活躍してくれるよ」と言われ、「そうか！」とひらめいたんです。

—当時は法律も整備されておらず、精神障害者を雇用する企業はとても少なかった時代です。

中澤社長からは「精神障害者の方を雇用することで、周りの従業員との関わりが深くなり、人にやさしい組織文化を形成することができる」と教えて頂きました。自分もそういう会社を作りたいと思いました。

—実際に雇用したのはいつからですか？

2007年に初めて精神障害者の方を雇用したのですが、うまくいきませんでした。頑張りすぎて掛け持ちで他の仕事も始めてしまい、1年半で退職してしまいました。今のように支援体制がなかったので、お母さんと密に連絡を取りながら支えました。お母さんはそれを機に当社を気に入ってパートを始めて下さり、今でも働いて頂けているんですよ。

—それは嬉しい話ですね！

当事者との接し方は、とても勉強になりました。社内に発達障害かと思える特性の方がいたんですが、「世の中には手帳を持っている障害者だけでなく、身近に障害者と同様に特性をお持ちの方がいるんだ」と気付くことができました。特性を生かした出来る仕事をして頂くことにしています。

「東大阪で障害者雇用をもっと広げたい」と考え、3～4年前でしょうか、就労支援機関や作業所を回り、交流会を企画したりしていました。しかし、なかなかうまくいかなかった。当事者の方を当社に連れて来て下さったりしたのですが、支援機関の対応が曖昧でなんか頼りにならない。疑問に思うことがあったのも正直なところです。

—【JSN】と出会ったきっかけは？

この広報誌にも登場されたポップコーンパパの宮平社長が「【JSN】から雇用して、うまくいっていますよ」と教えてくれました。聞けば体験実習を半年とか1年とか、長期に渡って行っていると。それならうちでも雇用できるのではないかと関心を持ちました。

—たしか2年くらい前のことと記憶しています。

【JSN】の茂木さんと出会い、「こういう目をされている支援員がいるところなら大丈夫だな」と思いました。人にやさしい支援員じゃないと、相手の気持ちに寄り添うことができないじゃないですか。支援員の志や姿は、めちゃくちゃ重要です。

「自立したいなら甘えるな」勇気を持って本人と向き合う

—【JSN】から実習生を受け入れるようになってから、会社の雰囲気に変化はありましたか？

特別に変わったことはないのですが、人に寄り添う従業員の姿を多く見るようになりました。うちは以前から「相手に寄り添い、受け入れ、相手に尽くす」という風土を大切にしてきました。受け入れる前から従業員全員で心理学の勉強会などを行い、自己理解・他者理解を深める取り組みを行ってきました。

—いろんな個性を持つ人を迎え入れる体制が、すでに整っていたのですね。

採用の際も障害ではなく「人」を見ます。適材適所で、当社に合った人を迎え入れ、その後は向かい合う。相手の障害特性を深く考えますが、決して甘やかすことはしません。何か問題が起こった時は本人と1対1で話をします。「自立したいのであれば、甘えるな」と。勇気がいることですが、愛情を持って普段から接して信頼関係を築いていれば、必ず伝わります。

—企業から見て、支援機関にはどういう支援や役割を求めますか？

支援機関の方には本人の仕事をしっかり理解しておいてほしい。仕事自体を理解するためには、会社とのコミュニケーションも不可欠です。会社が本人とどのように向き合っているかも、理解しておいてほしいです。あとは、本人を甘やかしたらアカンのんとちゃうかな。言い方や伝え方を工夫して、会社と連携を取りながら厳しく寄り添ってもらいたい。だから本人と深い人間関係を築いている支援員がサポートに入るのがベストだと思います。そして本人が成長するためのプロセスを、会社と共に考えていってもらえると有難いですね。

—最後に、【JSN】に求めることやアドバイスがあれば聞かせて下さい。

「精神障害者を雇用したいが、どこに相談してよいかわからない」という企業はたくさんあると思います。そのために、【JSN】さんは発信力を高めてほしいですね。「しっかりとサポートするので、受け入れてほしい」と堂々と発信をすれば「一度受け入れてみようかな」という企業が出てくると思います。遠慮する必要はありません。障害者雇用は企業の社会的責任ですし、企業の文化そのものが良くなっていきます。

—発信力を高めるというのは、この広報誌の使命でもあります。喝を入れて下さりありがとうございます！今後とも【JSN】をよろしくお願い致します。

株式会社ベル　大阪府東大阪市吉田下島 14-7　072-961-7171　https://ai-kando.jp/